

桜蔭俳話会 四月例会(第三四回)の鑑賞と

添削

メロン食む苦き言葉を呑み込んで 幸

添削・呑み込みし言葉ひとつやメロン食む

企業戦士の今は育爺のどかなり 友子

添削・孫いだく企業戦士や春の暮

鳥帰る眼大きな関羽帝

幸

添削・鳥帰る大き目玉の関羽帝

ホテルニューグランド旧館窓若葉 朋子

鑑賞・過不足なく叙景されている。

蘆芽組むくちばしの赤見え隠れ 朋子

添削・ちらほらと赤きくちばし蘆芽組む

二階バス窓に青葉の街展げ

幸

添削・二階建てバスの車窓の青葉かな

ひと月の赤子へやさし春の風 友子

鑑賞・赤子と春風の取り合わせであるが、

これはこれで良いと思う。

春嶺に支援のバターオスプレイ 明美

添削・春嶺やバター支援のオスプレイ

おぼろ夜の一村動きみな瓦礫 明美

鑑賞・瓦礫とおぼろ夜の取り合わせが良い。

潰さるる家の赤紙リラの冷え 明美

添削・取り壊す家の貼り紙リラの冷え

桜散り圭角の人旅立ちぬ

眞壽

添削・花万朶圭角の人旅立ちぬ

たんぽぽ踏むなしあわせが逃げてゆく

才美

鑑賞・口語俳句の表現が生きている。

古寺の裏に香れる藤白し 友子

添削・大寺の裏を灯して藤白し

渾身の競艇選手春を切る

かおる

添削・渾身の競艇選手春の波

重たげに小手毬の花風に浮く かおる

鑑賞・小手毬の花の量感が出ている。

ダンボール置かばベッドに春寒し 明美

添削・ダンボール敷きしベッドや春寒し

深海の魚の光れるみどり風 才美

添削・深海の魚の光りよ風みどり

純潔や若葉重なる九品仏 かおる

添削・純真の若葉重ねし九品仏

母のみぬ今年の桜沁みにけり 友子

添削・母を看て今年の桜終はりけり

夕長し港の灯りそめてより 朋子

添削・夕長し港の点り染めてより

この辺りむかし花街杉菜の芽 才美

添削・花街の名残りかすかや杉菜抜く

鬼ごっこたけのこ前線走り行く ツル子

添削・鬼ごっここの声たけのこ流しかな

俄雨満開の桜一人占め

眞壽

添削・にはか雨満開の花一人占め

子供の日見上げるほどの背比べ　ツル子

添削・子供の日孫の一人を見上げをり

通信吏の墓の若葉や対馬の地　幸

添削・通信使の墓の若葉や日本海

幾万の花びらチョコレート三枚　才

添削・幾万の花びらチョコレート二枚

時告げるメロディ悲しハマの春　ヤエ子

添削・時告ぐる楽の短調春の潮

君とだけ肩並べ行く桜道　眞壽

添削・どうせなら君と行きたし桜道

思わずに老鶯の声まねてみる　ツル子

添削・老鶯の声を真似る山路かな

囀りや鳥語の研究進みをり　友子

添削・囀や進む鳥語の言語学

老いてなほ体しなやか踊子草　ヤエ子

添削・老いてなほしなやかにあれ踊子草

風の来て喋るかのごと楠若葉　ヤエ子

添削・海からの風にささやき楠若葉

この池に茶店百年花あふち　朋子

添削・大池の茶店百年花あふち

樟若葉深井に星の降り込める　才美

添削・夜桜や深井に星の振り込む

春雷や地面ゆるがす絶え間なき　ツル子

添削・春の雷こころの襷を揺らしをり

千鳥なす若木の桜肌美人　眞壽

添削・千鳥なす肌の艶めき若桜

ペンペン草ゆらぎし音の聞こえをり　ツル子

添削・ペンペン草の揺らぎの音を拾ひをり

春風や二万歩完歩杖二本　かおる

添削・春風や完歩二万の杖二本

小綬鶏瞬時獲物に水しぶき　幸

添削・小綬鶏の嘴や瞬時の水しぶき

古民家のお玉杓子帰真園　かおる

添削・蝌蚪生れし池のきらめき帰真園

春風に乗つてゆらりゆら鳩の群れ　ヤエ子

添削・揺籃の春風受けて神の鳩

舞殿ののこる城跡弥生尽　朋子

添削・舞殿の泛ぶ城址や弥生尽

目借時本落つ音の夢の醒め　ヤエ子

添削・目借時本取り落とす夫の膝

枝伸びて水面に映ゆる桜花　眞壽

添削・枝垂桜水の光りを集めをり

(文責 代表 増田 守

不在投句 古野 明美、松浦かおる)